
あまりにも無慈悲な願い

狩人二乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あまりにも無慈悲な願い

【Nコード】

N9138S

【作者名】

狩人二乗

【あらすじ】

何もかもを兼ね備えた男には、どうしてもかなえない夢があった。
(ライトノベル作法研究所短編より転載)

とある都会の街に一人の男がいた。成績優秀スポーツ万能、その上背丈は百八センチをゆうに越えており、甘いフェイスの上に生える金色の長髪にはウェーブまでかかっているという始末。世の男性はその男を見る度に歯ぎしりをし、世の女性はその男を見る度に顔をとりけさせられる程であった。

誰もが誰も。

その男のことを知れば知る程、こう思う。 ああ、この人のかかれば叶わない願いなんてないのだろう、と。この人は、何の不自由もない世界で生きているのだろうと。

「そんなことは、ない」

その男は空を見上げながら、何の脈絡もなく呟いた。顔は若干沈んでいる。昼の街の大通り。赤信号で止まり、車が走る音で蹂躪される中。男のそんな姿を見て頬を染める女性が隣に居ることに、男は気付いていない。気付かないまま、もう一度、呟く。「そんなこと、ない」

誰かが僕のことを何不自由なく生きている人間だと言った様な気がしたけど、そんなこと、まるでない。

信号の光りが青色に移り変わる。それを見て歩き出す男。表情はまだ沈んでおり、歩く姿もどこかおぼつかない。男の頭の中は今、黒いもやもやでうめつくされていた。それは、悩み、というものだった。

「確かに僕はそんじょそこらの人間とは訳が違う。人間が出来ていくというより、僕は、出来ている人間なんだ」

女性にモテる。仕事で成功しているおかげである程度のお金も持っている。スポーツは昔から出来たから、運動神経はある方だろう。だけ。

何不自由なく生きているという訳ではないし、何でも願いが叶っ

ているという訳でもない。「僕には昔から夢があった。でも、その夢は、生半可な覚悟では叶わない代物なんだ」

ビルが立ち並ぶ横を歩き、行き交う人の様々な視線で見られながら歩く男は、誰にも聞こえないように小さな声で呟いた。

男には夢があった。それはあまりにもはかなげで、あまりにもどうしようもない夢。叶えている人間は世界の中に数え切れなくらい存在する。

けれども。

男には叶えるのが難しい。

そんな、夢。

「だから僕は、今まで我慢してきた」

叶えようにもかなりの恥ずかしさを伴わなければいけない。更には、例え叶えたところで、男にはどうしようもない。

何もかもを兼ね備えた男が、唯一兼ね備えることが出来なかった夢がある。「でも、もう我慢しなくてもいいかもしれない。僕はこれでも社会に貢献してきたつもりだ。だから、これくらいのがまを言ってもいいだろう」

というか。

もう我慢の限界だ。

太陽が輝く昼の時間帯。何の脈絡もなく空を眺めて呟き始めた男は、何の脈絡もなく、一つの覚悟を決めようとする。その時の男の表情は、人間の下劣な感情表現の最たるものと表現していい程、醜くなっていた。

そして。

周りに人が居る中、男は、誰にも聞かれないように細心の注意を払いながら、男の夢を言う。

「僕は、姉が欲しい。姉さんでもいい、姉ちゃんでもいい。姉貴でもいい。血の繋がっていない義理の姉が欲しい」

今から、その為の努力を惜しまないようにしよう。

男は静かに決意し、大通りを依然として歩き続ける。

まずは、正攻法だ。

そう思った男は翌日の仕事を、有休を使って休み、車を一晩中走らせた。新幹線で向かうという手だてもあったにはあったが、姉を手に入れるという夢を叶えようとする男はいかんせん興奮していた。新幹線の中でじっとしているなど不可能だと確信した為、男は車を使うことにした。

「姉。姉貴。姉さん。姉ちゃん。呼び方はどんな風にしようかなあ。なるべく僕と同じくらい背丈で、尚且つちよつといじわるな人がいいなあ」

車の中でニヤニヤとしながら願いを呟く男。長年我慢してきた鬱憤を晴らすかのようだった。男は決意する。例え誰かにひかれようと、そんなのはどうだっていい。まだ顔もしらない義姉が目の前に現れるまで、僕は止まらないんだ、と。やめられないしとめられないんだ、と。

高速道路を車で走って二十時間超。ガソリンが足りなくなったらガソリンスタンドによって止める、ガソリンをまんたんにする。

この二つの動作をする以外に、男は車を運転するという行為がしなかった。飲まず食わずで、目的地へと向かったのだ。

こうして一心不乱に向かい、目的地に着いた。「まずは、正攻法だ。ドン引かれるかもしれないけど、僕は止まらない」

着いた目的地は男の実家であった。

大層な田舎の中心に建つ古びた家。

チャイムを鳴らしもせずに横に開ける扉を開け、「ただいま」と声をあげる。

「なんだなんだ」

「あらあらまあまあ」

本来なら誰もが悲しむその事象を、男は欲していた。しかし、男の両親には隠し子は居なかった。

「でも、僕はあきらめない。必ず姉を手に入れてやる」

実家から離れ田舎から離れ、高速道路の休憩所。異常なことだが、一晩眠っていなかったのに、眠気は全くない。夢を叶えると決意した日の翌日の昼。男は、車の中で缶コーヒを飲んで黄昏れながら、未来の義姉の姿を想像していた。その人を手に入れるにはどうすればいいのか。まず義姉とは何なのか。姉とはどういう存在なのか。男の思考は泥沼にはまっていく。けれども、男はこの時間を苦には思っていないかった。寧ろ至高の時間であった。

「あの、車の中で長い時間何をしているんですか」

すると、開けておいた窓から声が聞こえてきた。聞いたこともない女性の声。横を見て女性の顔を見るが、全く見覚えがない。つまりは見ず知らずの女性ということになる。風でなびく長い黒髪を片手の指先で軽く押さえながら、落ち着いた雰囲気で女性は聞く。「貴方がここに来てかれこれ五時間くらいだと思えます。なのに、貴方はずっとニヤニヤしたままコーヒをちびちびと飲んでいました。驚愕です。私の中の常識では考えられないことです」

「いや、あの」

不覚にも男はその女性にみとれてしまった。なんだか大人びているその女性。キリツとした目つきが男の心をわしづかみにする。

その女性は。

男の理想の義姉像に、ぴったり当て嵌まる逸材であった。

「ふ、深い意味はありません。ただ、黄昏れていただけです」

「こんな平日の真昼間から、ですか」

「真昼間？ …… ああ本当だ。もうこんな時間になっていたんですね。全く気付かなかったです」

「信じられませんね、貴方。そんなに集中して黄昏れるなんて、なんだか矛盾しています」

でも。

そんな、貴方つて。「面白い人ですね。しかもカツコイイです」

男は残念な夢を持つ以外は全てにおいて完璧であった。たたずま
いもしかり、外見もしかりである。男は気付いていない。突然現れ
たその女性が、男に声をかけようか声をかけまいか五時間悩んだ末、
特攻したのだということ。休憩所に居るその女性以外の全ての女
性が、男とその女性が喋る様子を見て歯ぎしりしていることを。

「貴女は何故、こんな平日の真昼間にここに居るんですか」

「私はここでお土産を販売しているので、貴方とは違うんです」

「そうなんですか。でも僕もちゃんと有休とってるんで、大丈夫な
んですよ」

「そうですね」

「はい」

それから男と女は無言になった。車が時折通る音が聞こえる。無
言の状態が続くが、男と女は全く苦ではなかった。寧ろ、幸福の時
間であった。

「あの」「あの」

「貴女からどうぞ」「いえ、貴方から」

「いえいえ、どうぞ貴女から」「そうおっしゃらずに」

「で、では遠慮なく」「はい。お願いします」

ゴホン。

男は一度咳ばらいをし、車の窓の向こうで佇む女性に向けて、メ
ールアドレスを交換しませんかという旨を伝えた。

女がどのような返事をしたのかは、言うまでもない。

男と女はそうして付き合い始めた。所謂遠距離恋愛ということに
なる。しかし休日になると男と女は必ず会った。時に買い物をし、
時に映画を見たり。プールに行ったり紅葉を見たり。クリスマスツ
リーを眺めたり、花見を二人だけでしたり。一年が過ぎ、やがて二

年が過ぎる。

だが、男と女は、男女の関係には決してならなかった。二年が過ぎたのにも関わらず、手を繋いだ程度にしか進展していない。女はその現状に対して何も言わなかった。男は助かっていた。

何故なら、男は。

その女を、自分の義姉にしようと企んでいたからだ。

「だったら、プラトニックな関係のままでもいいとだよね」

「え？ 何か言った？」

「いや、何も」

男は決して忘れていなかった。男の夢を。男の願いを。男は女を一時も自分の彼女として見てはいなかった。男は、女を、自分の義姉候補としか見ていなかった。

なので男は女の年齢を一切聞かなかった。もし自分よりも年下だった場合のことを想像すると、堪えられなかった。

「ねえ。お願いがあるんだ」

遂に、三年が過ぎた。

男は限界だった。

「これにサインをしてほしい」

男が手に持つのは、養子縁組の書類だった。両親の名前は自分で偽造して書き、はんこも偽造した。

「僕には夢がある。絶対に叶えたい夢が」

女は困惑していた。その姿を見ていたたまれなくなったが、男は覚悟を決めた。

「今まで君を女性として見たことはない。僕は、君を、義姉としてしか見ていなかった」

男の言葉を聞き、女はうろたえたように見えた。

養子縁組の書類を見て、涙を流す。

「お願いだ。僕の姉貴になってください」

女は無言で、男が手に持つ養子縁組の書類を眺める。流れる涙が留まる気配がない。女は嗚咽をもらし始めた。男は心苦しかったが、女の返事を待ち続けた。

「そういうことだったの。貴方は、私をそういう目で見てたの」静かに言葉を紡ぎ出す女。「春も、夏も、秋も、冬も、いついかなる時も、貴方は私をそういう目で見ていたのね」

「うん」

「謝らないの？」

「うん。僕は後悔していない。例え君を傷つける結果に終わっても、謝ったら駄目なんだ。そんな気がするんだ」

「……そう」

女は。

流していた涙をポケットの中から取り出したハンカチで拭き取った。

「じゃあ、私も謝らない」

「へ？」

男は予想外の女の言葉に驚く。だが、驚きもつかの間。女はポケットの中から八つ折りにたたまれた紙を取り出し、男の前に開いて見せた。

女は軽く泣きながら、頬を真っ赤に染めながら、満面の笑みを浮かべていて。

男は、その紙に書かれた内容を見て啞然とする。

「貴方から聞かれなかったら私も言わなかった。でも、私は聞いてよかったのね」

男の紙にも、女の紙にも。

二人の年齢が、それぞれ記載されていて。

そして、女は。

男の夢の全てを無下にする願いを。

恥ずかしがりながら換言して、言い放った。

「私のお兄ちゃんになってください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9138s/>

あまりにも無慈悲な願い

2011年5月4日09時55分発行